

# 研究の現場から

道徳科学研究センターの  
研究動向

## 過疎地域の伝統宗教の事情

道徳科学研究センター社会科学研究室主任研究員

冬月 律ふゆつき りつ



撮影：筆者

今ではすっかり耳馴れた言葉「過疎」は、人口減少によって一定の生活水準を維持することが困難になった状態を言います。これまでに、国による過疎法の制定をはじめ、町村合併などのさまざまな対策が講じられてきましたが、依然として過疎化は進行しています。皆さんの中にも居住地域が過疎地域である方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

平成二十九年四月一日現在、全国には六四七の過疎地域があり、これは全市町村数の約三六%に当たります。過疎地域に居住する人口は八%に過ぎませんが、全国土面積の約六〇%を占めているのです。

明治以降、増加を続けていた日

本の人口は、平成二十二年をピークに減少に転じ、本格的な人口減少社会に移行しました。今後も人口減少が進むなか、過疎地域での少子・高齢化問題の対策は、ますます困難となることが予想されます。このような厳しい状況において、宗教社会学を専門とする私は、人口減少社会の到来を、日本の伝統宗教の危機と捉えて、研究を進めてきました。

人口減少が進む過疎地域に立地する神社・寺院では、氏子や檀家による護持を期待することが難しい時代となりました。特に私の専門領域の神社神道(神道の一形態、神社を中心とした信仰)では、地域の少子・高齢化に伴い、氏神の祭りや境内の整備といった維持継承が困

難な状況にあるところは少なくありません。さらに、地元を離れて暮らす子世代への「氏神信仰の継承」が、大きな課題となっています。日本人は、古くから正月の初詣やお盆の墓参りのように節目に行われる年中行事と、七五三や厄祓い、年祝などの人生の折り返しに行われる通過儀礼などの伝統的な宗教行為を、神社・寺院と深く関わる宗教文化(精神文化)とともに享受してきました。そのような氏子と檀家の減少は、社寺の存在意義に大きな影響を与えることは間違いないでしょう。こうしてみると、氏子や檀家のような信仰集団と社寺との間の「結束力・結合力」が弱

まっっていく主な原因が、過疎地域においては人口減少であると考え

られます。

長年の歴史のなかで地域に根ざし、形成・継承されてきた宗教文化、その中核を担ってきたのは神社や寺院といった宗教施設なのです。そのような社寺が、存続の危機に立たされており、このまま地域の人口が増えず、社寺の維持継承ができない状態が続くと、合併(合祀)もしくは消滅を余儀なくされるところが増えることも予想されています。

「なぜ、日本社会はこれまでに社寺を必要とし、維持してきたのか。そしてこれからの日本社会はそれらが必要としているのか」

この問いはまさに過疎地域の伝統宗教における重大な課題と言えるでしょう。